第4章 越前と能・狂言

第4章では、越前と能・狂言の歴史を概観するため、2つの視点を設定しました。1つ目の視点は「越前松平家と能・ 狂言」です。

徳川家康の次男・結城秀康を藩祖とする福井藩は、江戸時代を通じて転封することなく、越前の地を治めました。 そして、慶長8年(1603)、父・家康が征夷大将軍に任じられ、将軍宣下の祝賀能を行ったことが「武家の式楽」の端 緒となりました。

資料が限られることから、福井藩での能・狂言の実態については研究途上ですが、本章では福井藩史『国事叢記』の記録を中心に、初代・秀康から江戸時代後期に至る12代・重富の代までの能関連の記録を元に、その特徴を概観しました。また、越前松平家伝来の能面と能装束が初の里帰りを果たしました。



能面 喝食 彦根城博物館 桃山~江戸時代初期・16~17世紀



能装束 紅萌葱茶段 流 水菊枝模樣唐織 江戸時代・17~18世紀 彦根城博物館

2つ目の視点は「越前の猿楽と面」です。能を大成した世阿弥の著した『中楽談義』には、越前出身の面打の名が数多く記され、越前が古くから能面の産地であったことがわかります。その面を用いる越前の猿楽も、古い歴史のあることは当然で、鎌倉時代から南北朝時代には既に隆盛していたようです。戦国時代には、一乗谷の朝倉氏の領内で猿楽役者が養成されたとみられます。そして桃山時代には、江戸時代に幕府の御用を務める世襲面打家、大野出目家と越前出目家の初代を輩出しました。いずれも、北陸の白山信仰の拠点であった平泉寺の僧・三光坊に師事したと伝えられています。本章では、文献史料と合わせて、越前の地に遺された面を通して、越前の猿楽と面の多様さをご紹介します。



福井県指定文化財 越知山年中行事 文明10年・1478年 越知神社



能面 父尉 福井県立美術館 鎌倉~南北朝時代・14世紀

展示解説シート No.181 令和7年10月11日(土)発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永 3 丁目12-1 電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489 担当 佐々木佳美

印刷 (株)宮本印刷



展示解説シートNo.181

秋季特別展

能と狂言 -桃山の遺風-

●主 催 福井市立郷土歴史博物館

●会場 2階企画展示室、

1階松平家史料展示室

日 時 令和7年10月11日(土)

~ 11月24日 (月)

●休館日 10月30日 (木)、31日 (金)

はじめた

能楽は現存する最古の演劇と言われ、日本の誇る伝統芸能です。能は、奈良時代に中国から伝わった散楽が、日本の田楽や延年舞、曲舞といった時々の流行の芸能を取り入れて、現在の形へと変化を遂げてきました。室町時代に、観阿弥・世阿弥父子によって現在の能の原型が形づくられました。

江戸幕府を開いた徳川家康は、将軍就任の祝賀能を行ったことで、以降、江戸時代を通じて、将軍宣下や祝儀、饗宴の際の舞楽として振舞われる「武家の式楽」としての能楽の地位が固まりました。

一方、庶民の生活を題材とした狂言は、滑稽なしぐさや言葉の文で当意即妙な笑いを誘う芸ですが、そこには変化を遂げる前の古来の能(猿楽)の要素が遺されているとも言います。

越前は、この能楽で用いられる能面の産地としてつとに知られます。江戸時代には世襲面打家の越前出首家、大野出目家を輩出し、日本各地に残る能面には、その作が多く見出されます。

本展では、岡山市・林原美術館の能楽コレクションから、桃山時代のたいへん稀少な能装束を中心に、能・狂言の精華を展観いたします。また、越前ゆかりの能面や猿楽の歴史を通して、土地の歴史を振り返る機会としていただければ幸いです。

第1章 桃山の装束

備前池田家の什宝を継承した岡山市・林原美術館には、能装束・能面・能道具の一大コレクションが収蔵されています。これらの能楽コレクションは、江戸時代に岡山藩を治めた備前池田家で実際に用いられていたもので、その質の高さと規模は随一を誇ります。往時の大名家の能楽の在り様と歴史を今に伝える、たいへん稀有なコレクションです。本章では、国指定重要文化財の作品を中心に、桃山時代の能装束の精華をご覧ください。



重要文化財 能装束 紅白段枝垂桜模様摺箔 室町時代末~桃山時代・16世紀 林原美術館(前期展示)



重要文化財 能装束 雪持ち芦水鳥模様縫箔 桃山時代・16世紀 林原美術館(後期展示)

次回の展示

〈企画展〉 史料が語る福井藩と城下町

令和7年11月29日(土)~令和8年2月2日(月)

第2章 能 一花の風姿一

3代岡山藩主・池田継政(元禄15~安永5年〈1702~76〉)の描いた能絵巻「諷形図」と「猿遊之図」から、「高砂」「羽衣」「葵上」「橋弁慶」の4つの演目を選び、画中の人物の姿に合わせて、面と装束を選びました。現在の能楽に通じる能面と華麗な能装束の取り合わせをお楽しみください。あわせて、バリエーション豊かな能面の魅力をご紹介します。



能装束 紫地花熨斗流 水桜花模樣 長 絹 江戸時代・18世紀 林原美術館



能面 宝增(增女) 江戸時代初期・17世紀 林原美術館

第3章 狂言 一福と笑い一

高貴な人物を描く能とは対照的に、狂言は庶民が主役です。狂言は、古来の猿楽の要素を遺しているとも言われ、即興的な滑稽なしぐさや物まね、言葉の芸によって観衆の笑いを誘い、「をかし」と呼ばれました。面や装束は、形がデフォルメされたり、生地には簡素な麻が用いられたり、デザイン性の高い模様が多いといった特徴が見られます。能と比較することで浮かび上がる、素材の違いやデザインの面白さ、動物も登場する面の多様さなど、狂言ならではの大らかさや力強さをお楽しみください。



狂言面 賢徳 江戸時代・17世紀 林原美術館



狂言装束 濃萌葱麻地神楽鈴模様肩衣 江戸時代・17~18世紀 林原美術館

〈用語解説〉

| シテ(仕手、為手) | 主役 |
|-------------------|--|
| ワキ (脇) | シテの相手役 |
| ツレ (連) | 連れ添う役のことで、シテ、ワキそれぞれに従うことでシテツレ、ワキツレと呼ばれる。 |
| 子芳 子役 | 少年の演者が扮する役、また演じる少年のこと。 |
| 地 (地謡) | シテ・ワキなどの能役者以外の演者によって斉唱される謡。またその演者。 |
| こうけん 後見 | 小道具の出し入れや、シテやその他役者の装束を直したり、舞台上の進行を補佐する役。 |
| 囃子 | 笛・小鼓・大鼓・太鼓の四拍子で謡や能をはやしたてること。 |
| 直面 | 面を付けないこと。またその役柄。 |
| 前場・後場 | 一曲の前半部分を「前(前場)」、後半部分を「後(後場)」と呼び、前シテ、後シテのように呼ばれる。 |
| 中入り | 役者が一旦舞台から退場すること。中入り前を前場、中入り後を後場という。 |
| かいきょうげん 間狂言 | 能一曲の中で、狂言方の担う役とその演技。前シテの退場後に、後シテの登場までの間をつなぐ役で、曲目の主題や解説をする「語り間あい」がもっとも一般的。 |
| | 時代によって意味するところが異なる。現在は、能の演奏形式の一つで、能の一曲のうち、一部のシテの所作の見せどころ(クセ、キリ)だけを、地謡に合わせて舞うこと。 |
| 小袖 | ラージ/ニゥーマッ 近世以降、表着に用いた袖口が小さく袂のある衣服。きものの原型。 |
| うか ぎ 上着(上衣・表着) | 衣装の中で最上層に着る衣服。能装束では、直衣・狩衣・法被・側次・長網・舞衣・水衣・直垂・素袍。唐織・厚板・厚板唐織は上着と着付両用。 |
| 着付 | 上着の下(内側)に着る衣服。摺箔・縫箔・熨斗目・白練・白綾。 |
| からおり | 組織物の一。縦に生糸を用いて地緯糸を経三枚綾組織に織り込み、各種色糸の絵緯糸を浮かせて模様を織り出す。刺繍のような風合いが特徴。またこれを用いた能装束。主に女性役が上着に用いる装束で、能装束中、最も華麗。 |
| あついた 厚板 | 唐織・錦・綾織物・浮織物などを用いた能装束。主に男性役や荒神鬼畜が、法被・長絹・水衣・舞衣などの 上着の下(内側)に用いる着付。 |
| whit c 縫箔 | 刺繍と摺箔で装飾した小袖または、能装束。主に女性役が用いる。 |
| ずりはく 摺箔 | 金銀箔を布帛面に貼付すること。またこれを用いた小袖や能装束。女性役の着付に用いる。 |
| 腰卷 | 摺箔などの着付の上に縫箔を着て、その両袖を後ろに垂らす着装法。またそれに用いる装束。女性役に限って用いる。 |
| いろいり いろなし 紅入・紅無 | 織りや刺繍に紅色を用いること、またその衣装/紅色を用いないこと |
| 絵羽 | 着物の背・脇・袵・袖・襟などの縫い目の部分をまたいで模様が繋がるようにすること。 |
| | |

※参考文献:板倉寿郎ほか編『原色染織大辞典』淡交社、昭和52年6月 西野春雄ほか編『新版 能・狂言事典』平凡社、平成23年1月

〈きもの各部名称〉

